

# 「値しない者」



「お願いします! どうかお願いします!  
命だけは…命だけはお助け下さい!!」  
それは、息子の罪をゆるしてほしいと懇願  
する母親の必死の叫びでした。

しかし皇帝は、これが二度目なので、死刑  
こそ公正なる裁きであると答えたのでした。

すると、母親は言いました。  
「でも、私は公正な裁きを求めているのでは  
ありません。憐れみを乞い願っているのです。」

「だが、この者には憐れみなど値しない!」  
皇帝は表情も変えずに答えました。

しかし母親は、  
「陛下、値する者に与えるのでしたら、  
それは憐れみではありません。だからこそ、  
私は憐れみを乞い求めているのです」と言っ  
たのです。

少し考えて、皇帝はこう答えたのでした。  
「ならば、憐れみをたれてやろう。」  
こうして、息子は命拾いしたのでした。

この話は、神の恵みや憐れみについて理解するのを  
助けてくれます。神は、厳しく冷たい方ではなく、  
私たち一人一人を理解し、深く愛して下さっている方です。  
だからこそ、神はその愛ゆえに、求めるなら誰にでも、その  
憐れみを下さるのです。

とかく人は、神に愛されるためには、また助けていただく  
ためには、何かの善行を積まないといけないと考えがちで  
す。失敗や問題に直面し、自分に失望し、すべてに行き詰ま  
った時、こんな自分は、神だって助けては下さらないだろう  
と考えてしまいます。

しかし、神の恵みは、裁きを受けて当然の者を、その  
受けて当然の罰から免れさせて下さいます。それは、弱  
い人間に対する神の同情に満ちた愛の行為です。もちろ  
ん、神はその人に何かできることがあるなら、その人が自  
分のできることをするよう求められますが、神の愛と憐  
みは、人がそれに「値する」から与えられるのではなく、  
「恵み」によって与えられるのです。それは、人の義や努  
力によるものではなく、ただ、神の大いなる愛ゆえに与え  
られる祝福です。そう思うと、心が軽くなりませんか?

どれほど自分自身や状況にがっかりしていても、また将  
来に不安を感じても、誰かに腹が立ち、ゆるしがたいと感  
じても、「神の恵み」に心をはせるなら、それらの感情は次  
第に消えてゆきます。人は、「神の恵み」を受け取ろうとする  
時、その瞬間に、神の愛の大きさにふれるのです。そして、  
あなたから始まる愛と恵みの波紋は、周囲にも広がってい  
くことでしょ。

あなたがたの救われたのは、実に恵みにより、  
信仰によるのである。それは、あなたがた自身  
から出たものではなく、神の賜物である。決し  
て行いによるのではない。それは、誰も誇ること  
がないためである。

聖書 エペソ2章8-9節